

俺、女体化したので、

理想のビッチになっちやいまあ〜す♪

第一話 変身

犬文庫 025

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

## 登場人物

来栖 悠（くるす ゆう）

本編の主人公。

井口 麻由美（いぐち まゆみ）

悠の幼馴染。三つ編みおさげ。一人暮らしの悠の世話をしてくれる。地味。気が小さい。

樫渕 瞳（かしぶち ひとみ）

悠の隣のクラスで委員会が同じ。ギャルっぽい。気が強い。

猿橋 敬（さるはし たかし）

悠の親友。童貞。ガツシリした体格。黒髪短髪。地黒。

須田（すだ）

悠のクラスメイト。オタク。ガリメガネ。

林(はやし)

悠のクラスメイト。坊主頭。田舎者っぽい。

藤崎 結弦(ふじさき ゆづる)

悠のクラスメイト。爽やかイケメン。

木崎 スバル(きざき すばる)

悠のクラスメイト。チャラ男。

友野 恭平(とももの きょうへい)

悠のクラスメイト。チャラ男。

安東 信哉(あんどう しんや)

悠のクラスメイト。チャラ男。

来栖悠は、幼馴染の井口麻由美と並んで、学校までの道を歩いていた。二人の背丈はそんなに変わらない。悠は男にしては小柄な方だった。「ふわあ〜」

悠の口から、極めてだらしない大きなアクビがこぼれる。昨夜はあまり眠れなかったのだ。理由はことのほかオナニーが捗ってしまったからである。

（あ〜昨日見たAVのあの女、最高だったなあ〜。チャラそうなイケメン男優にナンパされて、ホイホイついて行って。しかも彼氏いるのに、簡単にぱかあ〜つと（笑）お股おっぴろげちゃって。あ〜思い出しただけで勃起してくるぜ）それが作られた設定の作られた映像だとわかっていても、興奮は尋常ならざるものがあるのだった。男にしては長い、耳を全部覆ったボサボサの茶髪を手ですきながら悠は歩く。そん

な訳で、今朝は髪を整える時間さえなかったのだ。

悠は無類のビッチ好きだ。その嗜好は極端でもはや病的とさえいつてよかった。イケメンと見れば性欲丸出しの雌の表情を恥ずかしげもなく晒し、彼氏がいようがノリと勢いで平然と浮気する最低クソビッチ女が大好物なのだ。短いスカートを穿き、胸元の大きく開きたいかにもな服を着て、男達を挑発して性的興奮に浸っているようなあさましいドスケベ女がマジでドストライクなのである。

そこそこ美形で、性格も活発で男らしい悠は女子達からそれなりにもて、告白され交際を申し込まれたことも一度や二度ではなかったが、正式に女性と付き合ったことはこれまでなかった。悠とて年頃の健康な男子なので、告白してきた女にちゃっかりエッチだけはさせてもらうということはあったが（それも結構な人数

に結構な回数を…)、ちゃんと付き合ってみた  
いと思える女には、いまだ出会えたことがない  
のだった。そんな女には、そうそう出会えるも  
のではない。なんせ悠は、彼氏である悠を平気  
で裏切って、他の男と浮気を楽しみ倒して恬然  
としているようなクソ女を求めていたのだか  
ら…。

(あくあんな女は現実にはいないものなのか  
な)

「ね、ねえ悠くん…」

朝から落胆する悠に、隣を歩く幼馴染の麻由  
美が話しかけた。大昔からそれはそれは長い付  
き合いの麻由美はとても地味な女で、もはや古  
臭くさえある三つ編みのおさげ髪をしている。  
童顔で、咲き誇るような笑顔はとても柔らかく、  
可愛い部類には入ると思われるが、同世代の女  
子達と比べると垢抜けが足りず、どこか芋っぽ  
い感じは否めなかった。

「ん、どした？」

「うん。あの…あの…あのね…今日ね…ちよつと…初めて…お化粧品に挑戦してみたの…ど…  
どうかな…？」

「……………」

麻由美の顔をじつと見ると、なるほど、確かにうつすらと化粧をしているようである。

「あの…あの…私ね…悠くん好みの女の子になりたくてね…その…頑張ろうと思つてね…」

麻由美はどこかおどおどした様子でそう言った。長い付き合いで気心の知れた仲のはずだが、麻由美は気が小さいのか遠慮深いのか、悠に対していつもこんな調子で話すのだった。

そんな麻由美も、実は悠に告白して交際を申し込んできた女子の一人だった。例によつてありがたくエッチだけは何度かさせてもらったが（幼馴染といえどもスケベ男子の悠はその辺になんら抵抗がない）、やはり付き合い方には至

らなかつた。当然である。両親と離れて実家で一人暮らしをする悠は、近所に住む麻由美に本当に世話になっているが、残念ながら彼女は悲しいくらいに悠の好きなタイプと真逆なのだ。

「はあ…」

悠は呆れた感じで麻由美に告げる。

「全然ダメだよ、麻由美。ちよっと化粧したくらいでは俺好みの女には程遠いぜ」

「そ、そんな…」

雨に濡れた子犬のような目で麻由美は悠を見る。

「いいか。この前も言ったように、俺が好きなのは男大好きな最低お下劣エロエロクソビッチだ。これだけは絶対に曲げられない。本気で俺に気に入られたいと思うなら、ちよっとやそっと化粧するだけじゃなくて、金髪のウィッグをつけて、ムチムチキラキラのボディコンエナメルワンピースを身に着けて登校するくらい



じやなきやダメだよ。マジで。もう全然ダメ」  
「そ、そんなあく。私：そんなの出来ないよ」  
麻由美は泣きそうな表情で困り果てる。今日の初めての化粧は、悠のためにした、麻由美の精一杯の努力だったのだ。

「せめて：もう少しエッチに：もう少し助平になれよ麻由美：そしたらお前にもチャンスあるからさ：」

どうせ無理だろうと思いつつ、日頃の恩もあるので、悠は幼馴染に気を使ってそう言っていた。

「うう：そ：そんな：助平だなんて：はあ：無理：う：うう：で：でも：私：が：頑張る：だ：だから悠くん：その：また今度：え：エッチする時に：い：色々：教えてほしいな：」

そんなセリフも、麻由美にとっては最愛の人に媚びる必死の背伸びだったが、残念ながら悠

には響かなかった。

「はあ…」

(ダメ…全然ダメだよ…)

悠は大きくため息をついた。理想のビッチはそうそういない。彼は、現実の女達に絶望していたのだった。

※※※

放課後。クラスメイト達が帰った後の教室で、悠と親友の猿橋敬は、怪しげな勧誘をしていた。勧誘を受けるのは、同じクラスの男子、須田と林。須田はやや薄気味の悪いオタクっぽいガリガリ眼鏡で、林は坊主頭が特徴的な田舎者っぽい小柄な少年。そんなクラスでも地味な二人に、悠と敬は持ち寄ったエロ本を見せながら勢い

込んで迫る。

「どうだい、どうだい？この女のこのスケベポーズ！こんなはしたないポーズを取って、こんな見るからにいやらしい紫のスケスケ下着を着て、そしてこんなエロ写真を撮られて多くの人に見られるってわかってるのに、この女のこの嬉しそうな楽しそうなバカ丸出しの表情！なんともあさましく卑しい表情！女の黒い部分がぐりつと剥き出されたようなこの顔！いだらろ？なあ、なんかもうグツとくるだろ？どうだい？どうなんだい？」

「う…うむ…」

「確かに…」

熱を帯びた敬の解説に、須田と林は腕を組んでそれっぽく唸る。お、これは手応えありか。悠は敬の後を引き継いで言葉を紡ぐ。おおいに芝居がかった演説調で。

「須田君、林君。いいかい、これが我々の愛す

る『ビッチ』というものなんだよ。そしてこの『ビッチ』をこよなく愛し、日々研究するのが我々『ビッチ友の会』なのだ。今のところ会員は二人だが、我々は既に膨大な数の資料やデータの収集に成功している。会員になってくれるなら全て自由に閲覧可能だ。今なら入会費は安くしておくよ」

「そ…それは…」

「おお…確かに魅力的だ…」

「うむ。そう言ってもらえて光栄だよ。昨今は、というか以前からずっとそうなのだが、男という生き物はどうしてもか馬鹿の一つ覚えで清纯清楚な面白味のない女にばかり惹かれるように、世間的にもメディア的にも評価されるのはいつもそういった類ばかりだ。大変嘆かわしいことにね。例えば今若い世代の男達から絶大な支持を得ている神楽鏡花（かぐら きょうか）なる超清纯派超王道アイドルがいるが、私に言

わせればあんなものは全然ダメだ。全くなんの魅力も感じない。なんの面白味も見出せない。聞けばあの女、スキャンダルの気配すら寸毫もなく、男友達の一人さえ絶対に作らないというほど清純清楚を徹底しているというではないか。ああ：愚かしい。実に愚かしい。世間は何故あんな女がいいのか？女は絶対にビッチでなければならぬ！性欲旺盛で！貞操観念に乏しく！頭が緩く！あさましく！狡猾で！強かで！身勝手で！笑えるくらい二枚舌！嗚呼！美しいほどに醜い！それが本来の女の魅力というものではないか！」

悠は思わず大声を張り上げた。そこには彼の切実な嘆きが込められていた。アイドルの例をあげて言ったように、悠の周囲の男達は、本当に揃いも揃ってみんな清純な女に夢中なのだ。

唯一の例外とっていいのが同じクラスの敬だった。ガタイが良く、地黒で男臭い、黒髪

短髪の敬は、ビッチ好きの悠の一番の理解者といつてよかった。彼とは本当に趣味が合い、いつも理想のビッチの話で盛り上がった。

敬以外には、趣味を共有できる仲間がまるでいなかった。年頃の男子にとって、好みの女性の話題は生活の中に占める割合がとても大きい。必然的に孤独になりクラスでもどこか浮いてしまった悠と敬は、こうして怪しげなサークルを作って自分達を慰めるしかなのだった。

今まで多くのクラスの男子を果敢に勧誘したが、そのほとんどが清純派アイドル、清純派女優、清純派声優などに夢中で、ビッチなんてと鼻で笑われた。露骨な嫌悪感を示す者もあった。だが、この須田と林は見どころがあるかもしれない。陽キャの悠達とは正反対の人種だが、マニアックでオタクっぽい性質が、なにかビッチに響くのではないか。

「うーん…」

「ど：どうしようかな：」

須田と林は眉根を寄せて悩んでいた。おちろ、おちろ。悠は願った。その時、背後で大声がした。

「こら！なに勝手なことやってんのよ、悠！つていうかあんた達なにしてんのよ！」

振り返ると、教室のドアのところで、隣のクラスの檀渕瞳（かしぶち ひとみ）が両手を腰に当てて恐い顔で仁王立ちしていた。

「ひい！」

「に、逃げる！」

その暴力的でキツイ性格は有名なのだろう。そして彼等オタクにとって瞳みたいなギャルっぽい見た目の人種は天敵なのだろう。須田と林は大事そうに鞆を抱えて反対側のドアから一目散に逃げていった。そしてどういいうわけか敬も彼等と足並みを揃えて逃げてしまった。いや、お前はそんなにビビらなくてもいいだろう

に…。

「ちよつと悠！またビッチがどうか言ってたでしょ？ホント懲りないわね、あんたは！」

肩を怒らせながら瞳が悠に近づいてくる。肩にかかったセミロングの髪は鮮やかなライトブラウン系の色に綺麗に染め上げられ、先の方はふわっとしたオシヤレなカールがついている。制服のスカート丈は短く、歳の割には化粧も派手。色は白い方だがとてもギヤルっぽい、フアツシヨナブルな今時JK。それが檀渕瞳だった。

「いいだろ…そんなの俺の勝手じゃないか」

興を削がれてしまった悠は、露骨に不機嫌な態度を取ってしまった。

「はあ…まあ…それは…もういいけど…っていうか、あんた！今日委員会どうしたのよ？なにサボってんのよ！もう終わっちゃったわよ！」



「え：今日委員会だっけ？」

悠と瞳は同じ清掃委員で、その委員会で知り合っただけだった。もっともハズレくじを引いただけの悠はその活動にはとても不真面目だった。会合の存在すら忘れてサボった悠に一言物申すべく、瞳は彼を探していたところだろう。

「そうよ！もう：なにやってんのよ、あんたはホントに：」

「悪い：次からはちゃんと出るようにするから：」

「本当よ？もう絶対に忘れちゃダメだからね」

「わかったよ。ごめんごめん。それじゃあな」

一刻も早くこの場を去りたい悠は、あえて殊勝な態度を取って話を終わらせようとした。そして鞆を持って瞳に背を向けようとする。

「ああ、ちよつと待ってよ、悠！話！私、まだあんたに話あるんだから！」

瞳に呼び止められ、なくなき悠は動きを停止する。二人は再び向かい合う。

「…なに、話って？」

「いや…だからその…この前の…例の話…ちや…ちやんと…つ…付き合って話…」

赤くなつてたどたどしく言葉を絞り出す瞳に、悠は素っ気なく返す。

「ああ…そのことか…だから、それは無理って言っただろ？俺はお前と付き合う気はないんだって」

「そんなのひどいわよ！ちや、ちやんと責任取りなさいよね！さ…三回も…え…エツチしたんだから！」

実はこの瞳も、悠に告白してきた女子の一人だった。そしてやはり悠が、軽うしくエツチさせていただいちやった女子の一人なのだった。

「いや、それはお前が拒まなかったからだろ？付き合うかどうかわかんないけどって事前に

ちゃんと断った上で、やらせてって言ったなら、お前やらせてくれたじゃん？それも三回も。別々の日に」

悠は平然と述べた。

「いやいやいやいや、そんなのおかしくない？普通三回もエッチしたなら付き合わない？それが普通じゃん！男として責任取るでしょ？そんなの当たり前でしょ？」

「……はあ」

悠の口から、力なくため息が漏れる。正にこういうところが、悠が瞳と付き合わない理由なのだった。派手なギャル風の見目で、おっぱいも大きく体もエロく、瞳は一見ビッチっぽいのだが、その実全然ビッチではないのだった。多くのギャルがそうであるように、瞳は存外に一途なのだった。本当に悠のことが好きで、悠一筋で他の男には目もくれない感じがひしひしと伝わってくる。頼めば簡単にヤラせてく

れたが、それは相手が他ならぬ悠だからだ。悠に對してだけ、瞳はこうなのだ……。これでは、とても悠を楽しませてくれそうにない。軽うぐい遊び浮気など、してくれそうにない……。

見た目からして、瞳ならひよつととしてと思つたのだが、その期待は無惨に裏切られた。瞳は至つて一般的な恋愛観を持っている。派手に男と遊んだりもしない。委員会も真面目に出るし勉強もそれなりにちゃんとする。なにより決定的だったのは、初めて抱いた時、彼女は処女だった。瞳はビッチの皮を被つた似非ビッチクソ清纯女だったのである……。

イライラが募っていた。期待していた分だけ、瞳には怒りと失望を抱いている。悠はつい彼女に攻撃的な態度を取ってしまう。

「あのなあ：俺別に、麻由美とも三回以上普通にエッチしてるんだけど？」

「なっ！」

「それとお前のクラスの山田と、安部…ああ、それから横田。あいつらとも二回以上エッチしてるな。クラスにも何人かそういう女いる。でもその誰とも、別に付き合ってねえよ？俺にとってはこれが普通なんだよ。エッチ好きだから。それくらい、色んな女とするんだよ」

そしてその中の誰一人として、悠の眼鏡に適うビッチはいなかった。みんなそれなりに簡単に股を開いた。だが、それはやはり、相手が悠だからだ。

それでは、ダメなのだ…。

「そんなの…おかしいわよ…おかしい…絶対おかしい」

「…そういうところがダメなんだって、お前は」  
きつと届かないだろうと思いつつそう呟いて、悠は瞳に背を向けた。その背中に、瞳の切迫した叫びが浴びせられる。

「わ…私！本気なんだからね！本気で好きな

んだからね！悠のこと！」

「……………」

悠は振り返らなかつた。

（だから…そういうところがダメなんだって）

今日も失望に包まれて、悠は一人家路につく。  
願いは一つ。ただ一つ。

ああ。どこかに理想のビッチはいないものか。

※※※

『いやわりい。ホントにわりい。俺、あの櫃渕  
って女どうも苦手でき、思わず逃げちやったん  
だよな。許してくれよ、悠』

「つたく、お前って奴は…ははは」

夜、一人の家で悠は敬と電話で話していた。

敬は昼間のことを、とても申し訳なさそうに謝

罪した。仕事の都合で両親が海外に移住したため、悠は現在、家族で住んでいた一軒家で引き続き一人暮らししていた。勿論最初は大変なことだらけだったが、麻由美の献身的な手助けもあり、今はなんとか形になっていた。慣れてしまえば、夜更かしもし放題だし、気楽な部分も多い。

『でもお前、あの女ともやったんだろ？ すごいよね？ ホント、モテる男は憎いぜ』

「そんな羨ましがることじゃないって。あいつ、全然ビッチじゃねえし」

『それとこれとは別なんだって！ 俺達非モテにとってお前のようなモテ男がどれほど光り輝いて見えることか！ ああ羨ましい！ 俺は今でこそこうしてお前とつるんですけど、ホントは須田や林と同じカテゴリーの人種なんだからな！ わかってんのか！』

「いや、そんなことはねえだろ」

『そんなことあるんだって！あの後三人で走って逃げながら、なんか妙に居心地良かったもん。しつくりくるっていうか。あ、ここが本当の俺の居場所だ、みたいな』

「ははははは！」

敬の冗談に、悠は思わず爆笑してしまう。底抜けに明るいお調子者で、見た目もワイルドで決して悪くない敬は、どういう訳かいまだ童貞なのだった。こんなに良い奴がどうしてモテないのか悠には不可解だったが、言われてみれば悠と違って敬はどこか野暮ったく無骨な感じがあり、女子との接し方にも長けていない部分がある。確かにあるような気もする。

『だから俺はあいつらと共に、これから先も当分童貞かもな』

「ふははっ！女って奴等はホントに見る目がないよなあ。もし俺が女だったら絶対敬にやらせてやるのに」



『いや嬉しくねえよ！気持ちわりいよ！』

「あははははは！」

悠は心から笑った。現実には理想と程遠く、毎日失望の連続だが、敬と話している時はそれを忘れることが出来た。

夜は、穏やかに過ぎていった…。

「ふう…」

敬との電話を終えると、時計は午後十時を回っていた。楽しくて、あつという間に時間が経っていた。

「はあ…ふああ〜」

ベッドに寝転んで電話していた悠は、そのままでの体勢で大きくアクビをした。本来ならまだ寝る時間では全然ないが、昨日の寝不足が響き、眠たくて仕方なかった。明日は土曜。学校の準備も必要ない。もうこのまま、眠ってしまおうか。どうしようか。そんなことを考えている内に、瞼が猛烈に重くなってくる。

朦朧としていく意識の中、悠の中には、どう  
いうわけかある一つの考えが浮かんでいた。何  
故それが浮かんだのかは定かではない。だが確  
かに、その考えが、その考えだけが、悠の中に  
明確に息づいていた。今にも消え入りそうな意  
識の中、それだけが何故か生き生きと脈を打っ  
ていた。

それは、さつき冗談でした発想。完全な戯言  
から、悠の中に生まれたものだ…。

(もし…もし…俺が…女…女…だった  
ら…)

悠は思った。はつきりと、思った。

(…なるのに…俺が…理想のビッチに  
…なるのに…)

※※※

目の前に、女が立っていた。素性はすぐにかかる。毒々しいピンクの長髪。頭に生えた二本の角。鋭く尖った耳。露骨に性的な匂いを放つ、黒いレオタードのような着衣。股間はギリギリの際どいハイレグで、男の情欲を煽る美しい脚がそこからスラッと伸びる。

この女はあれだ。いわゆる、サキユバスというやつだ。

「…ん？」

だが、そんなものが現実存在するはずはない。悠は間もなく理解する。今、夢の中にいるのだと。

『あんたさあ…ホントに…女になりたいわけ？』

目の前のサキユバスは眉を顰めたような渋い顔をしながら、とても馴れ馴れしい口調で言ってきた。存外に可愛らしい声だった。

「へ？…え？」

いきなりの話に、悠はまごついてしまう。それにしたってこの夢、妙にリアルだ。このサキユバスには、異様な現実的存在感がある。

『はあ：仕方ないわねえ：このキヤルム様があなたの願い、叶えてあげるわよ』

「え？…いや」

『いづくわよく。キヤルムちゃんのスーパーウルトラマジック！キュルキュルチュルチュル！パラリラポン！』

悠はなにも答えていないのに、サキユバスは話を進めてしまう。彼女は正面に立つ悠に右手をかざすと、チープな呪文のようなものを唱えた。するとその瞬間、悠の視界は溢れんばかりの眩い閃光に覆われたのだった。

サキユバスって、魔法とか使えるものだったっけ？その手の分野に詳しくそうな須田にでも今度聞いてみよう。リアルに見えて、案外安っ

ぼい夢だった。悠は呑気にそんなことを思っていた…。

※※※

窓の外で、ちゅんちゅん小鳥が鳴いていた。

悠は目が覚めたのだと知った。

「ふわ〜」

大きなアクビを一発。やはり昨日は敬との電話の直後、そのまま眠ってしまったらしい。布団すらろくに被っていないが、最近は夜でもすっかり暖かい。風を引いたようなことはないようだった。体調は、至って良好。なんの問題もない。

「……ん？」

しかし、そうして健康状態を一瞬意識した際、

妙な違和感に気づいた。風を引いたりはしていない。でもどこか、体がいつもと違うような。全体的に軽いような。自分の体が、変に丸くなつたような…。

悠はなんの気なしに、右手を胸のところへ持つていった。

すると。

ぷよん！

「……え」

自分の体からこれまで決して感じたことのない感触を、右手に覚えた。とても柔らかい。胸の辺りが、とても柔らかいのだ。これは。まさか。

悠は恐る恐る、部屋着の黒Tシャツの首元を大きく広げ、上から内部を覗いてみた。

「なああああああああ！」

漫画のような、バカみみたいな声をあげてしまふ。あげずにはいられなかった。そりやそうだ

ろう。

「あ…あ…あ…あるううう！お！お！お！お！お！おおおおおっぱいがあるううううう！」

無駄な贅肉もなく、それなりに逞しかったはずの悠の男の胸に、柔らかい女のおっぱいがついていたのだから。しかも大きい。EカップとかFカップとかあるだろうか。

「ああ…ああ…」

悠はみつともない呻き声をあげながら、玄関の姿見まで一目散に走った。そしてその前で、部屋着のTシャツと短パンとトランクスを勢い良く一気に脱ぎ捨て、一瞬で全裸になる。

自分の生の肉体を、姿見に真正面から映し出す。

「はあ…な…な…な…な…な…お…ゴクツ…女に…な…な…な…な…な…な…」

熱に浮かされたような声で、思わず悠は口走っていた。信じられないことに、悠の体は完全

に女のそれになっていたのだった。身長は変わらない。だが、体は確実に女性の形状になっている。胸が大きく膨らみ（乳首は鮮やかすぎる。真っピンク・乳輪も大きすぎずとても綺麗）、ウエストがくびれ、全体的に丸みを帯び、ゴツゴツした感じがまるでなくなっている。腕も足も、以前のそれと比べて明らかに綺麗でしなやかできめの細かい、女のものだ。全身の至るところをうつつすら覆っていた体毛も嘘みたいに消え失せ、体にある毛といえは陰毛くらいのものであった。

「はあ…ゴクッ」

そしてその陰毛の向こうに視線を伸ばし、悠はゴクリと唾を飲み下した。なくなっている。これまで苦楽を共にしてきたチンコが、全男にとつて、相棒といってもいい愛しきあのチンコが、チンコがチンコがチンコが、綺麗さっぱりなくなっているのだ。



「……ゴクリ」

そして、代わりにあった。悠にとっての、女の象徴。どす黒いビッチの分身にして醜く汚らわしい本質とも言うべき、生々しくグロテスクな形態をした、マンコが、目に染みる赤っぽい濃い色をしたマンコが、チンコがあるべき場所に、しつかりとあった。堂々と、鎮座していた…。

「はあ…ああ…ふう…すう…ふうう…」

大きく深呼吸して気持ちを落ち着かせつつ、悠はさらに事態を把握するべく努めた。顔面に目をやる。細かい変化だが、目も鼻も口も耳も、ちゃんと女のそれになっているような気がする。だが、赤の他人のものでは決してなかった。その顔を見ても悠だとわかる。以前の悠と、同じ人間だとはつきりわかるのだ。つまり悠は、全然他の人間に生まれ変わったのでは断じてない。

悠は悠のまま、性別だけが変化したのだった  
…。

「……………」

そういえば、夢の中に変な奴が出てきて、女にしてやるだとかどうだとか、そんな話を聞いたような記憶がうっすらとある。あれは夢ではなかったということなのか。というか今のこれが夢なのだろうか。いや、そんなことはない。これは現実だ。この現実感、間違いようがない。悠は確かに、昨日から連続する今日に、立っているのだった。

性別を、変更して。

正真正銘の、女になって…。

「……………」

とても信じられない現実だった。こんなことがあるなんて。普通は受け入れられないだろう。これまで自分が背負って生きてきた性別が、一夜にして手品のように入れ替わってしまった

のだから。ショック死したっておかしくない。  
それほど残酷な事態だった。

「……………」

だが。

「……………」

悠は。

「…………よっしゃ——————！！！！」

高らかに、歓喜の叫びをあげたのだった。

（ああ！これで出会えるじゃん！理想のビッチに！マジで出会えるじゃん！現実に理想のビッチがいなくてもいい！見渡す限りビッチの皮を被った清純一途バカ女ばっかでも全然いいよ！いいよいいよ！もういいよ！俺が！ああ！俺がなればいいんだから！俺が！俺が！他ならぬ俺自身が！理想のビッチを作り出せばいいんだから！）

悠の瞳に、姿見の中のマンコが映る。悠の、自分の、マンコが映る。

（ああ！やる！やるやるやるやるやるやりま  
くる！俺、この女の体で！この、女のマンコ  
で！マンコでマンコでマンコで！エロいこと  
やる！エロいこと！エロいことエロいこと！  
もうエロいことやってやってやってやってや  
ってやりまくるうううう！）

「はああああん！もう超楽しみいん！」  
色にまみれた香しい未来が想像され、嬉々と  
した声がこぼれた。その声を聞いてはたと気づ  
く。声も、ちゃんと可愛く高い女のものになっ  
ている。

「ふふ…うふふっ♪」

悠は悪知恵を働かせ、そしてすぐ実行に移し  
た。90センチはあるかと思われる豊満なバス  
トを両手で抱えるそれっぽいポーズになり、記  
号的に妖艶な色っぽい表情を浮かべ、そして鏡  
に映ったそんな自分の姿をじつと直視しなが  
ら、女のあさましさが滲み出たような露骨に甲

高い声を極めて作為的にこしらえ、言った。

「…あ…あたしい…え…エッチ大好き超々々  
淫乱娘々々来栖悠ちやんでえ々々す♪い…  
いっばいいっばい…男食べたいでえ々々つ  
す♪あつはあ々々ん♥♥♥」

(くううううううううううううううう！！！！)

その瞬間、悠の全身をビリビリと電流が駆け  
抜けた。マンコが濡れるのがわかった。女の体  
の、女としての性的悦楽の端緒に、悠は早くも  
触れていたのだった。

「はあん！ああ…やばい…やっばあ…い…あ  
…あたし…あたしい…これから、どうなっちゃ  
うんだろお…ああん♥もう、悠ちゃん超困っち  
やうう々々♥」

裸の体をいやらしくくねくねさせながら、女  
になりきり、悠はふざけて言う。まるで天地開  
闢の瞬間を目の当たりにしたような、超越的な  
感動があつた…。

「ああ：んん：はあ：ゴクツ」

しばらく感動に浸っていると、唐突にガチャガチャと、外から玄関の鍵を開ける音がした。

「ゆ：悠くうくん：おはよう～：お：起きてますか？」

麻由美の声だった。その気配には全く気づかなかったが、近所に住む麻由美が来たのだ。彼女には合い鍵を渡していて、こうして勝手に入ってくることも多い。悠も許可している。今日は特に約束はしていないが、だらしない休日を送ると予想される一人暮らしの悠の、朝食を作るに来てくれたのだろう。

やがて玄関を開けて、健気な幼馴染が姿を現す。尋常じゃないほど気分が昂揚している悠は、彼女がどう思うかなんてまるで考えず、今の自分の感動を素直にぶつけた。

両手を大きく広げ、裸の女の体を彼女に見せつけるようにして…。

「麻由美！見てくれ！ほら！俺！女になったんだ！すごいだろ！俺、もうホントに女なんだよ！ほらほらほら！」

「えっ…」

その姿を目にして、麻由美は固まった。そして、五秒…十秒…十五秒…。

「ぶううううううう」

泡を吹き、麻由美はそのまま気絶した…。

※※※

「うふふ！ねえ、どうう？あたしって可愛い？？あはは♪ねえ、どうう？？どうう？？悠ちゃんってば超エッチじゃなあ？？超いやらしい女の子に見えなあ？？やだあ？♪あはは！ほらほらほらほら！きゃはは♪」